

## 第3回新しい長崎県づくり懇話会

- 1 日時 令和5年8月21日（月）13時30分から16時30分
- 2 場所 長崎県庁3階 313,314会議室
- 3 議題 「新しい長崎県づくり」のビジョン素案について
- 4 配布資料 ○資料1 「新しい長崎県づくり」のビジョン素案（案）  
○参考 第2回新しい長崎県づくり懇話会における意見の概要  
○新しい長崎県づくり懇話会委員名簿
- 5 出席委員 安部 恵美子 長崎短期大学 学長  
入江 英也 熊本大学 熊本創生推進機構イノベーション推進部門 特任教授  
大川 香菜 みなとや 海女女将  
菊森 淳文 公益財団法人 ながさき地域政策研究所 参与  
楠本 美貴 にじがおか食育ファーム 代表  
佐々木 達也 公募委員  
佐藤 快信 鎮西学院大学 現代社会学部 教授  
下川 卓郎 株式会社 NAVICUS九州 代表取締役  
艶島 博 十八親和銀行 常務執行役員  
中島 みき 株式会社カヤック ちいき資本主義事業部 部長  
村上 純志 株式会社 サイノウ 代表取締役  
矢内 琴江 長崎大学ダイバーシティ推進センターコーディネーター／准教授  
山本 直子 公募委員
- 6 議事録

## ●事務局（小柳 政策企画課企画監）

ただいまから、第3回「新しい長崎県づくり」懇話会を開催いたします。なお、本日、永田委員におかれましてはご欠席、オンラインで佐々木委員、艶島委員がご参加いたします。よろしくお願いいたします。それでは、開会にあたりまして大石知事よりご挨拶を申し上げます。

## ●大石知事

本日は大変お忙しい中、第3回の懇話会を開催いたしましたところ、ご参加いただきましてありがとうございます。日頃から、皆様にはこの懇話会だけではなく、幅広い県政の諸課題についても色々ご相談させてもらったりアドバイスをいただいたり、また各地域で、それぞれのお立場で、県政の推進にお力を添えていただいておりますことを感謝申し上げます。ありがとうございます。

「新しい長崎県づくり」のビジョンにつきましては、これまで2回、皆様にご意見をいただくとともに、県議会でもご議論をいただきまして、今回、これらの意見等を踏まえた素案をお示しさせていただいたところでございます。

本日の懇話会では、お示したビジョンの素案が県民のシビックプライドを刺激できるのか、長崎県の未来への期待感を醸成するようなものになっているのか、そのような視点で、皆様方から忌憚のないご意見をいただければと思っております。私も本日は最後まで参加をさせていただきますので、ぜひご意見をお聞かせいただければと思っております。

私は長崎県の皆様の元気がなくなっていくような、長崎県民としてのプライドとか、誇りというものが少し失われてるんじゃないかという危機感を感じています。ぜひ、委員の皆様とつくるビジョンが、県民の皆様にも、長崎県は元気になっていくんだ、こんなもんじゃないんだと期待を持っていただけるようなものにしたいと考えております。

また、各分野において具体的に何に取り組むのかについてもぜひご意見をお聞かせいただければと思っておりますので、短い時間ではございますけれども、よろしくお願いいたします。

## ●事務局（小柳 政策企画課企画監）

ありがとうございました。それでは政策企画課長の内田より、資料についてご説明申し上げます。よろしくお願いいたします。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

政策企画課長の内田でございます。改めてどうぞよろしくお願いいたします。

私の方から、資料1についてご説明を申し上げます。資料1は、「新しい長崎県づくり」のビジョン素案としてお示しをしているものでございます。5月の第2回の懇話会では骨子としてお示しをしました。その後、県議会の議論、庁内での検討を重ねまして、今回素案としてお示しをしているものでございます。以下、概略を説明させていただきます。

まず、1ページの左側ですけれども、「ビジョン策定の趣旨」ということで、ねらいや意義を記載しております。2段落目ですけれども、将来が容易に見通せない時代、大きな変化の中にあって、将来の不安、あるいは憂いを払拭して、未来への期待感、それから本県への誇りを持って、新しい長崎県を築いていきたいという強い思いから本ビジョンを策定するというを、まず初めに述べております。

1ページの右側に行きまして「現状、課題」ということで、一つ目、「時代の潮流」を記載しております。社会経済システムの大きな変化が進められつつある中で、コロナウイルス等を契機としまして、人々の意識や行動が多様化していること。それから、生活の質、精神的な豊かさを重視する傾向が高まっているというような時代の流れをしっかりと捉える必要があることを記載しております。

二つ目、「長崎県の現状と課題」ということで、こちらはこれまでも説明している内容でございますが、人口減少等も相まって様々な影響が全国に先駆けて顕在化しているということが懸念されております。

三つ目、「長崎県が持つポテンシャル」ということで、豊かな自然、文化、それから交流で栄えてきた歴史を活用することに加えて、近年、まちの佇まいであったり、産業構造に大きな変化が生じている、まさに100年に一度の変革の時期を迎えており、こうしたポテンシャルも活用していく必要があると考えております。

2ページをお願いいたします。ビジョンのコンセプトを改めて、「未来大国」としたいと考えております。こちら説明は省略をさせていただきますけれども、コンセプトとして「未来大国」のもとにそれぞれありたい姿を描き、3ページから、重点的に取り組む分野である「こども」、「交流」、「イノベーション」、「食」、「健康」の5つをお示ししたいと考えております。前回の議論で、「未来大国」の下にこども大国だったり、交流大国のように、大国の中に大国がぶら下がるのは少しわかりにくいのではないかというご議論もありましたので、改めて整理しまして「分野」として、3ページでは特に大国という言葉は使わずに、5つの分野において、それぞれ本県のポテンシャル、背景等を踏まえて、その分野においてありたい姿を描いていく整理をしております。

次に4ページです。ここから、5つの分野の具体的な内容になっています。資料としましては、1ページに1つの分野を記載しております。例えば、4ページですと、「こども」分野を記載しており、副題に「こどもが夢と希望を持って健やかに成長していく」と掲げ、具体的なありたい姿として、こどもであれば3点。一つ目は「こども時間」、これは注釈に定義もしておりますけれども、こどもたちと一緒に過ごすなど、こどものために使う時間が1時間プラスされています。

二つ目として、「こども場所」。これは、こどもたちの居場所、あるいは子育て世帯などの拠点等も含め、こども場所が徒歩圏内にあることを社会全体で応援していくというような姿を描いております。

さらに三つ目としまして、デジタルとリアルで多様なつながりを創出するというところで、教育、学びの分野におけるありたい姿を具体的に記載しております。

その上で、3つの姿に繋がるような施策の方向性として、こどもであれば8つ記載をしております。

併せて、お配りしております参考資料がございます。こちら、「各分野のありたい姿の実現に向けた施策の方向性の時間軸について」という資料をお配りしております。こちら併せてご参照いただければと思います。こどもの分野で説明しますと、分野、副題がございますので、3つのありたい姿に8つの施策の方向性がぶら下がるようなイメージで捉えていただければと思います。併せて、2回目のご議論もありましたように、その時間軸を意識して施策を考えていくべきだというご指摘もありましたので、令和7年度までに事業着手を想定しているものと、それ以降、少し長い期間で考えるものに分けてそれぞれ丸をしているというようなことで、こちら議論材料として、ご参照いただければと思います。

資料1に戻ります。5ページ、こちらは「交流」の分野になりまして、副題として「人、自然、文化などの魅力に惹かれた人が集い、賑わう」というふうを考えております。ありがたい姿として3つ掲げており、1つ目は国際都市として認知されて、外国人観光客、あるいは留学生が訪れてまちが活気に溢れているというような姿。それから2つ目として日本一のワーケーションランドが誕生しているという姿。それから3つ目として、例えば釣り、あるいはアニメといったようなジャンルで、聖地や本場、拠点として、いわゆるマニアの方が県内各地に集っているということで、具体的な施策の方向性として、こちら8つ掲げている状況でございます。

6ページになります。こちらは「イノベーション」。「未来を創る新たな産業が育つ」ということで、前回、産業というのが少し薄れているんじゃないかというお話もありましたので、それは具体的に産業が育つということ掲げた上で、ありがたい姿をこちら3つ掲げております。1つ目としてスタートアップ、あるいは第二創業、さらには上場企業も創出されるといったことを通して、県内外から選ばれる「みなチャレ・フィールド長崎県」というのが実現しているというありがたい姿を描いてます。2つ目としまして、最先端のデジタル技術で、様々な地域課題を克服して県民の皆様が豊かで快適な生活を送っている。3つ目としまして、県内で生み出された再生可能エネルギーが、県内企業、あるいは県民の皆様にお届けできて、サステナブルな暮らし、あるいは企業活動が実現しています。ありがたい姿の実現に向けた施策の方向性が下段に記載の通りでございます。

7ページが「食」でございます。こちらは『豊かな自然の恵みを味わえる「美味しい！長崎」』という副題を掲げておりまして、ありがたい姿は3つです。1つ目は、食材、食の輸出という意味で、本県の豊かな食材が世界中に溢れて、そのおいしさがこどもたちを笑顔にしているというありがたい姿を描いております。2つ目として、本県にお越しただいて、本県でないと出会えない、味わえない体験があり、それらを通して長崎県全体の魅力が溢れるようなまちになってるという姿でございます。3つ目としまして、こちらは生産者やその先に携わる方の方向性として、長崎の大地と海の恵みを食に関わるすべての人の思いを繋ぎ大切にしているというありがたい姿を考えております。

最後に8ページです。こちらは5つ目、「健康」の分野でございます。「健康で生き生きと笑顔で暮らしている」ということで、ありがたい姿を2つ掲げております。1つ目は、いつでもどこでも誰でも必要な医療を受けられるというようなありがたい姿を描いております。それから2つ目、こちらはシニア世代を中心にしていますけれども、生涯現役で仕事やボランティア活動を生き生きなさっているというようなありがたい姿を記載しております。

以上、4ページから8ページ、それぞれの分野のありがたい姿、それからありがたい姿の実現に向けた施策の方向性ということで整理をさせていただいてるところでございます。

続きまして、9ページに参ります。「施策を貫く3つの視点」ということで、これも前回の骨子の中でご議論いただいたところではありますが、改めて整理をさせていただきました。9ページの一つ目を「長崎県デジタルの変」としております。こちらは、デジタル技術の活用ということで、9ページ右側にありますような、長崎県版デジタル社会の実現に向けて、デジタル化を加速させ、県民生活の利便性の向上、あるいは産業の活性化、さらには行政運営の効率化を推進するという内容で、その内容を「長崎県デジタルの変」と定義しまして、取り組んでいくことを記載をさせていただいております。

それから10ページ。3つの視点のうちの2つ目、「戦略的情報発信、ブランディング」ということで、10ページ左側の2パラ目、情報発信においては、伝えるべき方々に伝えるべき情報をわか

りやすく、かつ確実に届けるということで、県内外の皆様の行動変容につなげていきたいと考えています。あわせてブランディングにおいても、他県と差別化された、選ばれる長崎県の要素を訴求することによって、本県の新しい「長崎ブランド」を構築していきたいと思っております。あわせて10ページ右側ですけれども、3つ目の視点としまして「人材確保・育成」。これは教育分野であったり、様々な地域課題を解決するための人材の確保、育成を図ってきたいということで整理しています。

最後に資料11ページ「ビジョンの実現に向けて」ということで、取り組む姿勢ということと考えていただければと思いますけれども、3点記載させていただいております。1つ目は、「分野横断・融合的な取り組みの推進」ということで、これまで以上に、庁内でも部局横断・融合的な取り組みを強力に進めるということ。併せて、市町、民間、大学と連携を強化する。それから、県民の皆様との対話を通して、ビジョンの実現に取り組んでいくということで記載をさせていただいております。2つ目として、「循環型社会への転換に向けた取り組みの推進」ということで、こちらも前回の懇話会の意見等を踏まえ、SDGsの理念等を踏まえて取り組みを推進することで、安心して暮らせる持続可能なまちづくりと地域活性化につなげていくことを記載をさせていただいております。最後11ページの右側ですけれども、こちらは「長崎県総合計画とビジョンとの関係」ということで記載させていただいてる状況でございます。

以上、資料1の説明です。あわせて、少し触れた部分もありますけれども、参考資料として、前回の懇話会で皆様からいただいた意見の概要になります。そして、全ての要素の基本は人口だということも議論もありましたので、2060年に100万人規模を維持することを目指す長崎県長期人口ビジョン資料を、参考までに配布をさせていただいております。以上、私から概略説明させていただきました。

### ●事務局（小柳 政策企画課企画監）

それでは意見交換に入らせていただきます。ここから進行を政策企画課長の内田が行います。よろしく願いいたします。

### ●事務局（内田 政策企画課長）

どうぞよろしくお願いいたします。今日の議論の進め方ですが、冒頭で説明させていただきましたが、まず、素案の全体、策定趣旨、現状、コンセプト、それから施策を貫く3つの視点、ビジョンの実現について全体的な話をまずご意見頂戴した後、具体的に4ページ以降を一つずつテーマに沿って議論を進めていければと考えております。今回も前回と同様に、順番にご発言いただくという形ではなくて、フリーにご意見がある方は挙手にてお願いをいたします。オンラインで参加いただいている方も、挙手アイコンを表示していただければと思います。繰り返しになりますけれども、今回で最後の懇話会になりますので、ぜひ忌憚ないご意見をお聞かせいただければと思います。

それでは、早速ビジョンの素案全体についてということで、策定趣旨、現状・課題、それからコンセプト。5つの取り組みの方向性として5つでいいのか、施策を貫く3つの視点について、皆様方からご意見等あればいただきたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

### ●大石知事

確認事項でもご質問でも大丈夫ですので、ぜひ、聞いていただければと思います。最終的なアウトプットとしては、それぞれの分野について、親しみやイメージが湧くようなイラストを入れて、

県民の皆さんに伝わりやすいような工夫を考えておりますが、こちらについても、アイデアがあればご発言いただければと思います。

### ●事務局（内田 政策企画課長）

中島委員お願いします。

### ○中島委員

カヤックの中島でございます。どうぞよろしくお願いいたします。前回は「未来大国」について皆さんから色々言及があって、私もいくつかお話しさせていただいたんですけど、知事が「未来大国」という言葉に込めている思いや意思みたいなものをすごく感じたところもあって、きっと「未来大国」なんだろうなと思って今日来たところでした。拝見したときに、「未来大国」という言葉自体が、どのように市民、県民の方々に伝わっていくのかとその伝え方、デリバリーの方法が今後重要になってくるんだろうなと思います。この言葉だけでこういうことだなというように思いつきにくい部分があるのではないかと思います。

また、コンセプトの中にも、あえて書いていないのかもしれませんが、なぜ「未来大国」という言葉なのかが書かれてない。未来に対する期待を皆さんに持ってもらいたいという意味も含めた大きな志を持った場所にしていきたいという思いが、たくさん書かれているがゆえにわかりにくくなっていると感じるので、そこも含めてこの言葉自体が自分事化されるというか、意味づけされていくようにしなければいけないと思いました。

だから、デリバリーの方法の論点は結構重要です。先ほど、イラストなどのお話をされていたと思いますが、そういったクリエイティブな部分もそうですが、言葉で補足していくことも重要です。「大国」という言葉自体に、「えっ」と思う方はある一定いらっしゃるだろうなと私は今も思うところがあります。知事がこれまで仰られた内容をどれだけ県民一人ひとりに浸透させるか、どのように伝えていくのかはすごく大事で、ドキュメントだけで届けるには限界があるのかもしれないので、本当に伝え方という部分はすごく重要だと思いました。以上でございます。

### ●大石知事

ありがとうございます。前回は非常に多くの意見が出たところだと思って聞いていましたが、確かに委員の皆様のご意見を聞いて、前回ご説明したとおりこの案だけで100%伝わるとは思ってなくて、とはいえ、これだけで何割県民の方々に広く理解が進むのか、例えば、6割だけでも掴めて、残りの4割はメディアを通して私が話したり、各メディアの方々が議論したり、有識者の方々が議論する中でだんだん理解が深まっていくとか、そういった過程も必要なんだろうと思います。確かに、そこが足りてないのかなと聞いていて思いました。

コンセプトは確かに文字量が多すぎるので、例えば、いくつか项目的に「大国となんぞや」とか、「未来大国に込めた思い」とかわかりやすく、区分けするのもありだと思いました。皆様からコンセプトの書き方や説明の仕方について、ご意見をお聞かせいただければと思います。

### ●事務局（内田 政策企画課長）

下川委員。

### ○下川委員

私も、伝え方をどうするのかなと思っていました。もし文章で書くのであれば、例えば、憲法とか作って「この情報を皆さんやってください。」というような、学校で毎朝、最初と最後に読みたいなことでもできるかもしれないです。

一つのやり方としては、アニメーションやイラスト、マスコットのところで、何か紙芝居的にやるか、イラストを使ってみるだとか、そういうのがいいのかなと思いました。そこで登場人物が出てきますが、国王は誰になるのか。大石知事がやるのか、もしくは架空の大石知事に似せたマスコットにするのかとかですね。国民は県民になるのかなと思うんですけども、そのあたりの登場人物をどういうふうにするのかなということになると思います。一ついいなと思ったのが、がんばくんらんばちゃんは使えるんじゃないかと。うまい具合にストーリーを作って何かできるのではないかと思いました。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

山本委員。

### ○山本委員

私は前回、「えっ」と思ったうちの一人なのですが、今回は、バーンと「未来大国」と書いてありその下にその理由づけが書いてあるので、「未来大国」って何？と興味を引く。「これってどういうこと？」というところに行き着くので、下の大量の文章を読みやすくなるかなと思いました。実際に、読んでみると、結構納得ができました。ただし、私は、前回を見ての今回だったのでそれができたのかもしれないと思います。他の県民の方々が初めて見たときに下の文字量が多くて、見るかなというところは気になるところです。「未来大国」とバーンと書いてあったら興味は引くのかなと思いました。

### ○矢内委員

長崎大学の矢内です。前回の皆さんのご意見や本日の皆さんの意見を聞いていて思いましたが、「大国」という言葉を使うとしたときに、私は前回資料を見たときに、独立したいのかなという雰囲気を感じました。

一方で、この文章を読んだときに、最後に「一緒につくっていきましょう」というメッセージが書いてありまして、私はそれがすごく大事なのかなと思いました。誰か一人、抜き出たリーダーが引っ張っていくというよりは、色々な可能性や個性、力を持っている皆さんが居るのが長崎だと思っていて、みんなと一緒に作っていこうということが求められている大国となんだなど、この文を見て思いました。伝えていくときには、長崎には色々な人がいるんだ、一緒につくっていききたいんだということが伝わると思います。

しかし、その後を読んだときに、多様な主人公がいるというイメージがつきづらいかなどというのが正直な感想になります。私自身は長崎県の出身ではないんですけども、長崎に来た時に長崎の歴史というのが、もう地層が丸見えという感じで、いろんな石碑があるとか今までの人たちの息吹を感じる場所で、まちを歩いているだけで歴史とか物語を感じるまちだと思っています。そういう様々な物語が合わさってつくられていく未来というのが伝わるの良いし、受け取った側が勇気をもって、一緒に作っていききたいと思えるものになると良いということをしています。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

他にいかがですか。楠本委員お願いします。

## ○楠本委員

長崎が、人口も減少し、交流もイノベーションも経済も健康も問題が山積みになってるような印象を受けました。例えば、私のように子育てに特化した職業の人が頑張ることによって、長崎のどの効果に繋がっているのか。人口増加、子育てしやすいまち、留まりたいまちというところに私が貢献できているのかどうか。デジタルで広告を出している方であれば、長崎をもっと県外に打ち出すことによって観光客が増えてくるとか。一人ひとり県民の皆さんが、自分の行動が長崎県のどこに繋がっているかというイメージができれば、みんなで長崎県をつくり上げることに積極的に参加できるのかなあと思いました。こういう会議に出席していると、自分たちが引っ張ってこういう気持ちにはなるんですが、県民の立場で聞くと自分の役割が感じにくく、受け身になってしまうと思うんですよ。だから、それぞれの役割がどこに繋がっていくかというものが見えてくるともっと面白いかなと思います。

## ●大石知事

ありがとうございます。すごく重要な観点だと思います。自分事にするのはすごく大切で、SDGs、グローバルアジェンダがあれだけ自分事にしてきたのは、SDGsの一番の成功した部分だと思います。SDGsの中に何を入れ込むかという議論よりも、SDGsがなぜ成功したのかというところが私は非常に気になっています。

県政としては長崎市や佐世保市だけでなく13市8町ある中で、県民の皆さんにお示ししたことを自分事なんだと、自分も一緒につくり上げる当事者なんだということをどう伝えるのか。どのようにすれば、県民の皆さんに自分事として捉えていただけるのか。県政の施策の位置付けとしてどのように打ち出せば県民を巻き込めるのかについても、お考えがあればご助言いただきたいと思っています。

## ○佐藤委員

佐藤です。先ほどもありましたが、大国には、多様なステークホルダーが相互に関わっている。今までの冊子という形はもちろんあっても良いんですが、それとは別に、例えば、長崎の未来へつなぐガイドブックや手引き書など、県民一人一人に冊子的なものを渡して、こういう政策をやっている時に、自分ができることを自分の行動計画として書き込むようなものを作っても面白いかなと思いました。今までこういったものは作っていない。

県と県民の間は距離感があって、そこを埋めていくための方法として、こういう政策に自分はどのような形で、どういうことができるのかを書き込んでいく。その書き込む行為が、自分の今のポジションというか、自分の中でできることや自分と向き合うものになるというものもあるのではないかな。そういうものを作っても面白いかもしれない。それをアプリで、「私やりました。」と共有したら、知事賞が出たり。それこそ、DXじゃないけれど、バーチャルな長崎県の中で、一生懸命やった人が表彰されるようなものを作っていくとことがあって良いと思うんですよ。

「選ばれる長崎県」という言葉が多く出てきますが、認知度で止まっている気がしていて、認知度よりも人気度がなくて駄目なんですよ。結局、来てくれないと、駄目なんです。そういう意味では、認知度のもう一個先の人気度を高めるために、どういう面白さやワクワク感というものがあるか。そういうことを展開していくのが大国のリーダー。そういうアプリなどを開発するところがど



ここにあるのと言ったら、長崎に若くてコンパクトにソフトウェア開発をやってる人たちがいて、ビレッジを作って、その中で、今日は島原半島で温泉入りながらソフト作りまして言っていたら面白いよね。そういうところにどんどん発注をかけて、展開する。

今は、高齢者の方もスマホを使っている。自分たちの実生活と政策をつなぐことがやっぱり大事です。だから、そんなことにチャレンジしている、「ちょっと長崎おかしいぜ。」というような、「何かおかしいな。知事がどうも大国って言ってるらしいよ」と言われるのも良い。さっき「独立するのか」というような発言もありましたが、独立する勢いでもいいかもしれない。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

菊森委員、どうぞ。

## ○菊森委員

今回の文章を拝見して、5つの分野を作られていますが、この選び方は今までにはなかったと思います。どういうことかという、「交流」と「食」とは、これまでも嫌と言うほど、総合計画とか総合戦略、いろんなどこに盛り込まれてきました。

長崎の特徴を一言で表すとしたらこの二つということで、今まで言われてきた内容ですけれども、今回、新たに「こども」や「イノベーション」、イノベーションという言葉自体は今までに使われていないことはないですが、今回、この新しい概念としてのイノベーションとは、これからの長崎県の方向性を示していると思います。今まで、口では言われてきたけど必ずしも実現していない。こういう非常に大きな課題を担っているという意味でのイノベーションは、私は非常に意味があるなと思ってます。

それから5番目の健康についても、これまで健康まちづくりという言葉はありましたが、長崎はそんなに健康ではない。どのような方法で県民の健康を実現するのかという議論になった時には、様々な課題が実は横たわっていて、それを解決することによって、本当に健康な県、長崎県が生まれてくるのかなと思います。この「こども」と「イノベーション」と「健康」というのは、これからの県政の方向性として大事なことだと強く感じます。

「こども」については、北陸3県はこども分野に力を入れていかざるを得なかった。こどもを大事にする文化があった。一方、長崎県は、全国から見たら必ずしもこどもを大切にしない文化ではない。私も県のサポートセンターと十数年に渡って関わってきましたが、こどもは大事だけれど、他県に比べたら県民意識としてはまだそんなに強くないと感じています。改めて、その「こども」をクローズアップさせることによって、これからの未来ある長崎県をつくっていくことが本当にできるんじゃないかなという希望を持たせることができたのではないかなと思います。

「イノベーション」について、今までは産業の革新などの中でこのイノベーションという言葉を使っていると思いますが、これまでのものと次元が違う、発想の転換、発想を新たにすることもそうですし、各産業、分野ごとにイノベーションをそれぞれやらなければならないと思います。そういう意味でも次元の違うイノベーションをここで謳おうとしているのかなと感じます。

「健康」については、これは当たり前と言えば当たり前なんですが、実は、本当に健康であるかどうかについては、例えば、今までであれば、総合計画の中で健康診断の受診率とかそういう言葉で表わされたりすることもありましたが、そういうものではなく、根底から健康な県をつくっていきましょうということで、今回、発想を変えることはできるのかなと思います。

全体をまとめていくと、「こども」と「健康」の2つは、今まであまり中心概念として、総合計画、総合戦略の中に組み込まれてきていないと思います。そのため、非常に斬新な感じがしていて、本当にこの県が変わるのではないかと強く感じております。

具体的に並べられている施策がどの程度、これから新しくなるのかはまだまだ課題はあると思いますので、その辺を工夫されたいのではないかと思います。以上です。

## ●大石知事

ありがとうございました。菊森先生おっしゃるように、総合計画とは全然違う観点から作ってありまして、部局・分野横断的にやっていくこととしています。

今回、5つの分野を作っていますけれども、将来的にはもっと増えてもいいと思うし、終わったところは減ってもいいかもしれません。今回代表的に作ってみようという話でございます。

佐藤さんがおっしゃったように、参加型の何らかの仕組みを作った方がいいんだろうなど。表彰とかですね、認知されるような何かがあった方が、県民の方々も自分がやってることが県政の発展に繋がってるんだとイメージしやすいのかなあと感じました。ぜひ皆様から何かあればよろしくお願いします。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

他に、全体を通していかがでしょうか。

## ○大川委員

離島の壱岐から来ました、大川です。今回の資料を送っていただいて「未来大国」ということで、前回の懇話会に参加してなかったんで、一旦距離ができて馴染みが湧かなかったんですけど、もちろん思いがあって作っていただいたと思います。ですが、長崎って、私が離島に住んでいるからというのがあってと思いますが、住んでる場所で全然状況も違いますので、駅周辺の再整備だったり、離島からすると自分事としてなかなか捉えづらいなど。特に壱岐、対馬は距離的にも少し遠い感じがあるなどというのを、率直には感じました。

しかし、一番最初にこどものことを重点的に取り組むと書いているところは素敵だと感じました。たまたま機会があって子育てをしているというのものもあるかもしれませんが。

こどもの住環境など考えて、地域活動をしているんですが、こどもの環境を考えると、同時に大人の環境も変えていくとか、大人の暮らし方、人生観も変わることを、同時に考える必要がありますし、同時に良くならなければならないということをお感じしました。「こども」と書いていますが、これは生きとし生けるものが全てという意味で、私は「こども」とを捉えることができれば、もっと良いのかなと感じました。

あとは、5分野に分けて書いてありますが、これも全部同じことではないでしょうか。こどものことを考えると、こどもの環境として交流があって、イノベーションがあって、食はもちろん大事だし、健康がそこにある。その中でこどもを育てて、次の新しい世代を作っていくところで、分けて考えるのももちろん良いですし、もう少し、0歳から100歳までの人と一つに繋がっているような見え方があると良いと感じました。

分野を5つに分けて書いているんですけど、こども分野のありたい姿の実現に向けてのところは、こどもは年代で全然環境が違うので、一括りにしないで、幼児期とか、小学校、中学校、高校、大学となった時に、分野別、年齢別にもう少し具体的に、考えると良いと思いました。「こど

も」って一括りではあるんですけど、それぞれの年齢によって環境が変わってきたり求めていることも違うと思うので、ありがたい姿の実現に向けてのところは、世代別だったりとかが考えられているといいなと思いました。

## ●大石知事

皆さんの意見を聞いていると、本当に色々なアイデアがあると感じていまして、大川さんがおっしゃった年齢別の話は、佐藤先生がおっしゃっていた自分行動計画の話にちょっと繋がるかなと思いました。もしかすると「こども」は年齢別、「交流」は地域別・業種別など、そういった方々に「あなた方はこうしましょうね。こういう貢献の仕方がありますよね。」というメッセージ性を打ち出すときには、ありなのかなと思いました。

確かに、こどもは0歳から18歳まで結構幅が大きいので、小学生に対して「こういった勉強頑張りましょうね。」みたいな親しみのある言葉で世代ごとに書くのもありだと思いました。

気になったのが、1ページの「3 長崎県が持つポテンシャル」の2パラ目なんですけれど、まちの佇まいが変わるとの話。これ県がよく使う言葉なんですけれど、確かに、五島の人からすると、どこにも入っていないと感じると思います。離島からすると、駅やIRは本土にありますから、ここを具体的に書き込んじゃうと、自分事から遠くなる人たちも多いのかなと思いました。この書き方って変えたほうが良いでしょうか。落とすとか、ない方が自分事にしやすい。あるとですね、駅前の方々ばかりいうことで、確かに聞くんですよね。私自身も、いや、それ長崎市のことばかりやろうっていう結構言われることがあるんで。それか島のこと入れ込むとか、並列で書き足すとか。どうですかね。

## ○村上委員

過程と結果によって、違うかなと思っていまして、まちの佇まいが大きく変わってそれがすごく誇れるものということになれば、冒頭に知事が言われたシビックプライドに繋がっていくかなと思っています。それがまだ見えてないので、どうしても、自分の住んでる地域以外はそうってしまうのは仕方のないことだと思います。まちもあれば、離島もあって、それが長崎の魅力だとも思います。ここは細かいところなんであまり気にされなくてもいいのかなと思います。

全体的なこと、この「未来大国」という言葉に対して、「未来大国」が具体的にどういうイメージなのか。例えば、こういう長崎のようなまち、県とかっていうのは日本全国どこも同じようなものだと思います。だから、例えば、そういった地域のロールモデルになる言葉が一つあるとすごくわかりやすくなると思いました。例えば「ポテンシャル都市、県」とか、「変革の」とか。これからどういう都市になるのかとわかるようなものがサブタイトルのあたりにあると良いと思いました。それに対して、ストーリーとしてどのように絡んでいくか。こどもたちが、食と健康で、交流が世界の人たちと交流して、イノベーションを起こしていくとか、そういったものとかがあると目指すべきストーリーが頭に浮かびやすいのかなと思います。

最後に「施策を貫く3つの視点」に「長崎県デジタルの変」がありますが、ここに記載されているのはデジタルの活用という、特に行政側のことが書かれているかと思っています。これはこれでは良いと思いますので、加えて、デジタルについて、特に、こどもがどのように学ぶか、実際に活用できるのか、というところが入ると良いと思います。また、高齢者の方も、今の世の中、デジタルのないところはないと思っていて、何かしらのデジタルが活用されて、繋がっているところで、使う

ことは良いですが、実際に誰がそれを作っているのかという話になった時に、「長崎の人たちが作ってるんだ。」となるとさらに良いなと思いました。これは、「人材確保・育成」の部分にも関わってくると思います。そういった視点や考えもあるのではないのでしょうか。

## ●大石知事

ありがとうございます。最後の点は非常に重要だと思ひまして、先日「こんな長崎どがんです会」をさせていただいた時に、デジタルがテーマだったんですが、やはり、教育に入れ込むべきだろうと。まず、デジタルリテラシーをしっかりと上げていく、これは中長期的な話になっていくと思います。けれども、10年後であれば、リテラシーを教え込んでも、ものになっていく世界観、時間軸だと思いますので、ぜひ、今の点は書き込めるかどうか検討したいと思います。

デジタルだけではなく、金融リテラシーとかです、そういったところも非常に重要なところだと思います。

「長崎県デジタルの変」で、デジタル活用に注力している部分があるので、柔軟性を持たせてもうちょっと厚みが出るようにやってみたいなと思います。ありがとうございます。

## ○安部委員

時間軸という話が出ましたが、かつて、長崎は、コンセプトに書いてあるように世界に開かれた出島という窓があって、ワクワクするものとか、活気に満ちたまちでした。しかし、現在、日本の中でいうと地方にあって、人口減少もしているようなまちです。また、この県の持つ課題としては、離島があると。ものすごく課題がたくさんあるということですがけれども、かつてのワクワクした活気に満ちたまちを再び思い出して、長崎がもつ長崎のポテンシャルを評価することにみんなが取り組むというコンセプトが「未来大国」なのではないかなと私は理解をしています。そして、未来を志向する。未来に希望を。

長崎の未来は、そのまま放っておくと人口は少なくなりますし、島は限界集落になるかもしれません。けれども、希望と期待を持ち長崎県を元気にするためには、この重点的に取り組む5つの政策を具体化して実現していくという決意表明がビジョンのコンセプトである。

今回のコンセプトはビジョンだから、「未来大国」という言葉は、私も大国というのはイメージ的にどうなのかという心配を申し上げたんですけども、「未来大国」という言葉であえて先に進んでいくというか、未来志向がすごく表われていってるんじゃないかなと思います。コンセプトに「未来大国」と書いて、その次のたくさん文章が書いてある中に「未来大国」とは何か、そして、長崎県は未来大国というのをこういうふうに考えます、「未来大国」を作るために、ここでは5つの分野がありますので、それについてこういうふうに取り組みます。というような流れにしていくと、県民の方に字面でわかってもらえる。もちろん、イラストとかイメージ的にわかっていただくのも大切なんですけども、文章でわかっていただくことも必要だと思いました。

また、重点的に取り組む分野の中で、5つがベストなのか、一つ一つの中を区切ってありますけれども、これで十分なのかということを検討、煮詰めていただければいいのかなというふうに思います。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

佐々木さんお願いします。

## ○佐々木委員

離島の話が出ましたので、私もちょっと発言をしないといけないと思ひまして、手を挙げさせていただきました。資料1の「現状、課題」の「3 長崎県が持つポテンシャル」のところで、「中国や西洋の文物や文化を受け入れながら」というところが、朝鮮半島を含めたアジア圏というご配慮いただければなと思ひます。

ビジョンコンセプトの中で、「鎖国時代、「DEJIMA」が」というところがあって、他の委員さんからもご指摘がございましたが、長崎市だけがクローズアップされているという印象を持ちます。大国なので、中心となる場所というのは必要だと思ひます。周りのいろんな地域の人たちが誇りになるような、「県都長崎」みたいな形ではっきり言うてしまうことも一つの方法ではないかなと思ひます。長崎市に住んでいない自分たちには関係ないというよりは、逆にその中心部にみんなが目を向けていくような方向性づけができないか、中心にぐっと注力するみたいな形でいた方が、私はいいんじゃないかなと思ひたところですよ。

そして、中身の部分についてですが、子育て中の私の家庭にも、お米 de 子育て支援のお米券をいただきました。部局間の横断・連携というところでいくと、これは子育て支援としての取り組みの方だと思ひんですけど、農政の方は、例えば、これと連動して長崎県産米のアピールをやっていく。例えば、そのお米券で買ったお米を食べている写真を X (旧 Twitter) やインスタ等の SNS に上げてもらう、また、県産米のイベントなりを同時並行でぶつけていくとか。私は横断・連携というのはこういうことだと思ひます。それぞれが持っている手駒を 1 個 1 個合わせる事が重要じゃないかなと思ひますね。

そして、先ほど知事が言われていたデジタルをどう活用するかというところにも繋がっていて、先ほどの SNS を親子で利用する。また、ホームページとかでその県産米を特集するようなページを作ってそこにアクセスしてもらって、長崎県の農業のことを勉強してもらう。これだと今度は、この中に書いてあることと関わる時間を 1 時間プラスするっていう材料にもなり得ると思ひますよ。今回の県産米の配布は経済支援という名目が大きいと思ひますが、そういった取り組みも発展的に利用していく、そういう事が今後求められていく部分になるんじゃないかなと、今回のお米の配布をきっかけに考えたところですよ。以上ですよ。

## ●大石知事

ありがとうございます。ビジョンじゃなくても、いろんなところで、今のご意見を採用させていただきます。

## ●事務局 (内田 政策企画課長)

入江委員どうぞ。

## ○入江委員

熊本大学イノベーション推進部門の入江でございます。よろしくお願ひいたします。

「大国」残っちゃったねっていうのが正直なところでございます。「大国」が残るのは、知事の思ひなので良いですが、「未来大国」の後に続く説明文でいうと、住みやすさとかシビックプライドであるとか、そのような満足度が大国である県であると、何となくそういうイメージですよ。人口は国力でもあると思ひますけども、決して人口減は悪い事でもなくて、渋滞もなくなるし、

満員電車もなくなったりするし、その分、住みやすさが向上するかもしれないなとも思っています。人口が減ることによって、タクシーの運転手の方やバスの運転手の方が不足して、いろんな交通網に影響が出ると。それを解決するのがイノベーションであり、先ほど村上さんがおっしゃったように、IT、デジタルの力かなと思っています。

そこでさっき私が発言したかったのは、村上さんが「長崎県デジタルの変」に触れたので、この「デジタルの変」は、施策全体を貫く視点という形になってます。これをやるのであれば、まず、今日、県庁に来た時に真っ先に「先生、ハンコはありますか」と言われてしまったので、みなさんが悪いわけではないんですけども、まずやはりそこから変えていただけるといいのかなと。押印をまず無くす。調べてみると、総務省が出してる情報をもとに時事通信さんも関連のところで出してるデジタル度ランキングでいくと、残念ながら長崎県は2020年に42位になっています。このランキングの順位というのは上下するんでしょうけども、まず、やはり行政の方々から、DXとかデジタルというところをガンガンやっていただくということは、各分野に全部デジタルが入ってるので、そこは必要かなとなると、自治体にデジタル担当の人がいらっしゃいますよね。そういった部署の引っ張って行く方を作って、各分野とデジタルをしっかりと結びつけていくような施策というのもありなのかなと思っています。

あと、私はいつも熊本から来るんですけども、県庁に入ると「長崎の変」の猫の絵がまず目に入って、何だろう、「長崎の変」というのは、となる。「未来大国」もそういう打ち出し方というか、何だろうこれはというようなものがあると、この施策がもっと県民の方に広がっていくんじゃないかなと思いました。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

艶島さんいかがですか。

## ○艶島委員

皆さんのお話を聞いていて、私もビジョンのコンセプトについては共感させていただいています。「未来大国」というこの4文字の言葉について、皆さんいろいろご意見あったと思うんですけど、この4つの文字の後ろの2つの大きい国の「大」というところと「国」というところで、どうしても、どんなふうに伝わるのかなと心配しています。大国とは何かとウィキペディアとかで調べたら、ある分野において国際的に大きな力を持つ国のことということで、今回の重点的に取り組む分野において、国際的にも勝ち抜いていくような形に持っていこうということで、「大国」を選ばれたんだろうと思うんですけど、県なのに国というところでどうなのというのが、県民の皆さんにどう伝わるかなと思っして。

例えば、「地域大国」とかそんな言葉もあると思うんですけど、一定の地域において世界的にも大きな影響力を持つような地域ですよみたいなところがあると思うんで、「大国」とは何かお示しした方がいいかなというのが一つあります。

もう一つは、この5つの分野について大川さんがおっしゃっていたことと私も同意見でございまして、「こども」と一括りになっていて、若いこどもたちのイメージしか湧かないような記載があったので、教育だとか、そういったところの方向性がもう少し分かるようにしていただきたい。

それから、この5つが並列で本当にいいのかなと感じています。5つとも全部大切なことだと思うんですけど、経済活動だったり産学官とかいろんなところで連携していく中において、こどもの分

野は直接的な営利目的としてなかなか取り組みづらいところもあるんで、例えば、1丁目1番地として「こども」をもっていくとか、そういった順位づけじゃないですけど、こどもたちのことを大切にしていますよとか、その辺もあったほうがいいかなと思いました。私は以上です。

## ●大石知事

ありがとうございます。とても重要な意見だと思います。「未来大国」の4文字は、前回の議論の中でもやっぱり「国」って何だという話も結構議論したんですけども、あの後も引き続き考えていたんですが、「大県」と書いた時に何かちょっと変な感じがするなという。

「地域大国」という話は、国の立場であればありなんじゃないかな、地域が元気な大国みたいな考え方もあるかなと思ったんですけど、いろんな議論を重ねたうえで、国と長崎をなぞらえて、住んでいる方々が誇りを持って元気に生きている国だということをコンセプトにこの4文字と今のところさせていただいております。ここについては、先ほどからご意見をいただいているように私は議論があってもいいと思っていますし絶対議論は起こると思います。けれども、できるだけ建設的じゃない議論を減らせるように、皆さんのご意見を参考にしていきたいなと思います。

また、分野の順位付けも、やはり「こども」を1丁目1番地にしているところもありますので、どう表現できるかは検討させていただきたいと思います。他の4つの部分について、本当に順位付けを生々しくすることは難しいと思いますけれども、一体どれが一番大切なんだとか、どこに力を入れていくんだというところをミスリードしてしまうのもよくないと思いますので、そこはしっかりと検討していきたいと思います。

分野については、内部の議論で非常に時間を割いたんですけども、やはり分野のネーミングでグレーなゾーンが非常にあって、綺麗に棲み分けできているわけじゃないんですね。これはどこの分野に入るんですか、という議論も結構あったりとかして、教育とかこどもとか、必ずしも分けられるものではないですから、そういったところはもうエイヤと線を引くことも行政のビジョンを作る側の責任なのかなと思いつつ、心を砕きながらやりたいなと思っています。

## ○矢内委員

すみません、皆さんのお話を聞きながら思ったことがあって、「未来大国」の「大国」という言葉が1個の塊のような感じに聞こえます。長崎って本当にたくさん島があって、大村湾を見ただけでも島がいっぱいあったりとか、「未来大国」というよりは「未来諸島」という感じのイメージはしました。大国じゃなくていろいろな塊が集まっている、そういう未来を志向するところなんだよというふうなものがあるといいのかなと思ひまして、私は「未来諸島」というのはどうでしょうかと思いました。

また、それぞれの分野の位置付けについて、重点というよりやっぱりこどもを真ん中というところ。こどもというか人の育ちを真ん中にしたときに、どういうふうに、それらの関係が見えてくるのかなということが分かるというかなと思いました。例えば、人の育ちを真ん中にしたときに、次に大事になってくるのは健康だよ、その周りに健康であるためには何が大事なかな、食があるよねとか交流があるよね。そして、イノベーションがあるよねと。そういう図式化をして、どんどんこどもなのか人の育ちみたいなものを真ん中に置いて、これからやっていくことが見えるというふうなのがあると良いのかな。そういう見せ方だと良いのかなということも思いました。以上です。

## ○中島委員

私たち神奈川県企業が他の地域にも入り込んでいこうとして検討するときに、どの地域に打診してみようかと考えることは大事なことです。そのうえで、この内容を見て、私たちの会社が投資してみようと、持ち込んでみようというのは考えにくいなと思いました。例えば、こどもが軸になったとして、こどもに対するものに長崎は注力しますとなると、例えば、うちは教育の事業をこれからやるので長崎に持っていこうというふうになると思います。軸に据えた内容というのは、その言葉自体が、県外の企業からしてもこの街はここに注力するんだ、この県に持って行ったら何か進むかもしれない、聞いてくれるかもしれないと思うシグナルになるんだろうなと。だから、「未来大国」ってことがすごく大きくシンプルに語られているんですけど、例えば「未来こども大国」みたいなものでもいいかもしれないですし、他県企業が入りやすい、何か持っていきたいなと思えるようなフレーズはあってもいいんじゃないかなと思います。

皆さんの話だと、こどもって軸だよ、育てていくこと大事な軸だよというのすごく共感するところもあったし、そういったことに注力する企業はこれからもっと増えていくと思います。サステナブル＝こどもがどう生きていくか、成長していくかだと思うので、そういう話をしてもいいんじゃないかなというのが一つ。

それと「未来大国」ってすごくこってりしているなという印象があります。長崎の言葉で「どう？」っていうのって「どがんね」っていうんですね。それこそ「未来大国どがんね」でもいいんだろうなと思ひました。これは、最終的なデリバリーの話ではありますけど、何かこってりしたものに、ちょっと薄めるみたいな形の話になるんですけど、「こども」というものを立てるという話と、皆さんに違和感を持っていただきながら、考えてもらうためのフレーズみたいなのはあってもいいんじゃないかなというのを思ひました。すみません、以上です。

## ●大石知事

ありがとうございます。中島さんが最後おっしゃってくださったフレーズを入れ込むというのは、前回の懇話会の時にちょっとお話したんですけど、下の5つの分野にも「大国」という言葉をつけてたんですね。私は各分野でも、明るくて強い場所であって欲しいという思いがあったので、そういう言葉をつけてたんですけど、どれか一つを選ぶと、それ以外が目立たないというのと、また「こども」というところを県が目指す言葉にしてしまうと結構埋もれてしまうところがあって、他の都道府県も「こども」ってつけているところを皆さんもいくつか思いつくと思うんですけど、「こども」が薄まっちゃうと、市町、基礎自治体も含めると「こども」を1番目にしているところと横並びになっちゃうということあるので、いろいろ考えた結果ではあると思います。

まだ、こういった議論が起こるということはコンセプトのところはちゃんとできていないんだろうなと、ちょっと反省したところですので、ちょっと「大国」の定義とかイメージとか、読んだ人が文字面だけでも、何となく求めてるところの6割7割ぐらいまで理解してくれるようなリーディングの書き方を検討したいというふうに思ひます。ネーミングも、「諸島」というお言葉もありましたし、日本だったら何か「未来列島」とかあるかもしれないですけど、何か響きそうな感じがします。確かに、存在がたくさんいるということはしっかり意識しながら。

「大国」という言葉を加えたのは、長崎県民が一つにユナイトして欲しいという気持ちなんです。

長崎県民が、自分の県について誇りを持って欲しいという思いがあったので、そこをイメージして表現させていただきました。そこもちゃんと伝わってないと思ひましたので、今後打ち出す前に、しっかりこの文章を検討していきたいと思ひます。



●事務局（内田 政策企画課長）

その他、よろしいでしょうか。

○山本委員

もやもやしていたのですが、そもそも、どんなにわかりやすく書いても、県民の一人一人が自分事として捉えることができる力があるのかなというところが気になりました。やっぱり「へえ、そうなんだ。」くらいで済ませている人が多いのではないかと思います。色々なデータで大人の学習時間が全国平均よりも長崎県は低いというのが出ていて、そういう社会風土を改善していかないと全体の質が高まらない。全体の質を高めていくと問題に気づきやすくなる。問題に気づいたときに、こういうところに目がたって自分事になるのかなと考えています。文科省の方は主体的な学びと一般に言われています。

今、私は学校図書館に勤めているのですけれども、学校の方も主体的な学びは意識されているのですけれども、変換がちゃんとできているかなというところで疑問に思っています。主体的な学びとなると、こどもたちが自発的に「これって何だろう」ということを調べるとなると、まず、図書館で書物に当たるとかいうところが入口になるはずであるのに、図書館という小説を読むとか、物語を話のために読むというところが、かなりまだウェイトが大きいというか、なかなか調べるために利用するということまではなっていない。そういう状態の中に一人一台端末が入って、ネットで安易に検索して「そうだったのか。」みたいに調べるので、その情報が正解なのか、ちょっと間違っているのかが分からない状態で正解だと思い込むというか、正解だと思って進めていくという形になってしまっているところにすごく問題を感じています。

「こども」の分野のところ、主体的な学びを継続できる大人になるような教育というところを念頭に置いた何かが入ってきてもいいのかなと考えています。そうすると、大人を変えるのはなかなか難しいですが、今の中学生ぐらいにそこが徹底できると、5年後10年後には自然と公共図書館を使って問題解決するという力がついてくることができると思うのです。今の中学3年生とかにも、人口は今から減るのよってという話をすると、それだけには興味を示さないのですが、島原鉄道って南の方に行かなくなったよねというところと絡めたりすると、そこでパンッと自分事になるのですね。そういう投げ方っていうのは、大変なのだなと思うのですけれども、それを自分で気付ける力というのを作ってもらいたいと思っています。

●事務局（内田 政策企画課長）

ありがとうございました。

○安部委員

まず「長崎県デジタルの変」について、デジタル化とかDXというのはもう全国、世界規模の話でありますので、教育現場など当然どこでも進んでいきます。「長崎県デジタルの変」と言うときに、長崎のことを考えると高齢者がたくさんおられて、デジタルデバイド、情報格差というのが問題になってると思います。マイナンバーの保険証の問題なんかもその典型なんですけれど。そういうことに対して県がどう捉えていくかについても、県民のためには大切なことだと思いますので、それを入れていただきたい。実はデジタルデバイドは、こどもの貧困格差の中でも起こりやすくなっているというのもあるんですね。ですから、情報格差をなくすということを県として加えるとい

うことが、未来を明るくするために必要じゃないかなと思う。

それから、先ほどの5つの分野がありましたけど、これはグレーではっきり区分できないということでしたけれども、例えば「こども」で「こども時間」を増やすとなったら、労働生産性と言いますか、親の仕事の時間を短くしないといけないわけで、イノベーションが必要。総合計画は縦割りです。5年後どうします。というような目標を立てますけど、ビジョンはそれとは違うので、むしろそれぞれの分野が分かりやすいような建付けにした方がいいような気がしました。

## ●大石知事

デジタルデバイドの問題は本当に大事だと思います。そこはしっかり表現の仕方をですね。市町も非常に重要な存在ですので、なかなか県の立場で言いにくいところもあります。そこはしっかり意識をしながらやっていきたいと思います。最後の、どちらの分野にするのかっていうところ、これはおっしゃる通りで、どこの分野に置くかは単なる行政の整理の中での問題なので、実際を言うと分野横断的・部局横断的にやっていて、総合計画は縦割りを意識しながらやっている。ここは、しっかり各分野が関係するような部局を巻き込んでやるということですので、どの分野に入ろうか、おそらく見ている方向は変わらないんだけど、行政として整理をしてビジョンを描き、県民に説明していく上でどこに落とし込んでいくかという、そういう作業なんだろうと思いますので、こっちの分野に入っちゃったから不都合が生じるということがないようにしっかり対応していきたいと思います。言われている事は本当に重要だと思います。ありがとうございます。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

議論も大分進んで参りましたが、開始から1時間半経ちましたので、一旦休憩をはさませていただきます。15時10分から再開させていただきます。

— 休憩 —

それでは再開したいと思います。ここからは、主な分野ごとにありたい姿、それから施策の方向性をセットで議論していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。4ページになりますけども、「こども」の分野についてご意見等ある方は、よろしくお願いいたします。楠本さんどうぞ。

## ○楠本委員

子育てもそうなんですけど、こども単体ではなくて、家族含め、一緒に考えていかないと全然追いつかない。こどもだけに自分が一対一で接していると成長は早いんですけど、周りの家族と一緒に成長しないと、結局一対一を離れたらまた元に戻ってしまう。そういう現象が起こってしまうと思っています。こども食堂をしていますが、その場は解決しても、例えば、貧困、となったときに、その場のお腹を満たすことはできるけど、その子が自立して社会に出るまで、継続的に支えてあげられるのは周りの環境なんです。

私たちはできるだけ、その子が自立するまで、継続的に支えることを考え、1回やり始めるとやめないということを掲げてやっているんです。こどもだけじゃなくて周りの大人を支えることも念頭に入れて、こどもを育てていくことをやらなければならないのかな、と特に思いました。

こどもとの時間を1時間プラスと書かれているので、どうやって1時間を捻出させてあげられ

るか、というところをもう少し具体的にできたらいいなって思います。

こども食堂のことも書いてあって、こども食堂は行政施設と民間やNPOとかでやっている。この連携ってあんまり取れていない。民間は民間、行政は行政となっているので、もっと民間とか行政とか関係なくできるような施設、例えば、廃校になった学校を使って、地域全体が使えるような施設を1個作るとか。極端ですけど、そうすることによって、こどもだけではなくて、その地域全体、お年寄りも含め、ここにコミュニケーションを求めていける。そういうことができたほうが、本当の意味での子育てに繋がるんじゃないかなと単純に思います。何かそういう、地域で皆が利用できるような施設を行政、民間、協力してできたら、私は理想だなと思っています。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

菊森委員。

### ○菊森委員

こどもに対しては強い意見を結構昔から持っておりまして、日本社会ってすごくこどもを大事にしてきて、発展してきた国だったと理解しています。こどもを等しく大切に社会づくりをしていかない限り、県もそうですが、この国の将来はないとずっと考えてきました。たとえ、貧富の格差があっても、昔の日本社会は、結局、こどもに親は選べないんだという考え方があって、家庭環境や教育機会などの格差というものを極力解消していく仕組みを考えてた方が良いのではないかなと私は思ってきました。

すべてのこどもが自分の能力を高めていって、それを活かして、より良い次世代の社会を全体として作っていく。たとえ貧富の差があったとしても、そういう社会を作っていく考え方というのが非常に大事じゃないかと思います。そういう意味で、こども政策というのは、極めて、最大限重要な、政策ではないかなと思っていました。これをどう実現するかということ、実現におけた施策の方向性にもっと盛り込んでもいいのかなと思います。

### ○大石知事

ビジョンが総合計画と違うというところが、非常に重要なポイントかなと思ってまして、楠本さんが今おっしゃってくださった、具体的にどう落とし込んでいくのか、どう1時間の捻出を実現していくのか、ビジョンの中で書き込まなければならないのか、表現しなければならないかと思いますが、全体としてこども政策をどう進めていくかというところは、おそらく総合計画になるかなと考えています。

ビジョンとして、県民が進む方向をわかりやすいように示し、それについて誇りを持ってくれるような、そんなものを描くのがビジョンの位置付けだと思っています。なので、そこは網羅的に総花的にはならない方が良くかなと考えています。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

佐々木さん。どうぞ。

### ○佐々木委員

こどもの分野のところではいきますと、大人がこどもたちに何かしてあげるところが、このビジョンの中ではメインで書いてありますが、年代が上がってくるとともに、一緒になって地域づ

くりやまちづくり、長崎県の未来づくりみたいなのと一緒に参画して作り上げていく場を大人たちが、どう提供できるかということも、方向性として入れていただきたいなと思います。

人口流出が顕著になっていきますと、流出を止めたり、いったんは出てまた帰ってきてもらったりするきっかけとして、どうにかまちに愛着を持ってもらう必要がある。そのためには、こどもたちが一緒になって、まちづくりに関わって、自分のまちに愛着を持つということが大事じゃないかなと思いますので、こどもたちに与えるだけではなく、一緒にまちづくりや地域づくりをして行こうぜ、みたいなのところをビジョンの中で明確になると、周りの大人も声を掛けやすくなるのかなと思います。以上です。

### ●事務局（内田 政策企画課長）

ありがとうございました。矢内委員どうぞ。

### ○矢内委員

今の佐々木さんの発言とかなり重なるというか、同じことを思っているところがあります。ぱっと見るとこどもと書いてあるんですが、中身は、全部大人が何をするかの内容で、どんなこどもでも若者でも大事にしたい、という思いが伝わるのが大事だなと思います。

でも、やっぱり長崎で育っていくことを、若者やこどもたちにイメージが伝わると良いのかなと思いました。加えて、どんな年齢のこどもたちでも、若者でも、この地域を一緒に作っていく仲間なんだ、ということが伝わることは大事だと思います。若者も含めて、こども自身の主体性を大事にしたいというメッセージが、具体的な施策を考えるうえで必要なのかなと思いました。以上です。

### ●事務局（内田 政策企画課長）

ありがとうございます。

### ○村上委員

デジタルを活用したとよく言われるんですけど、従来の教育方法のまま、デジタルを取り入れるだけだと、あまり意味がないなと思っていて。デジタルでどのように教育方法を変えていくかという部分、例えば、動画の録画ができるのに、毎回ライブで行うということは、デジタルを本当に活用できるのかなと思いますので、本当のデジタルの活用というのは、そういった従来の教え方そのものを変えていく必要があると思います。

その一方で、教師の負担は大きく、あれもこれもデジタルを活用して、と言いますが、現場の人たちは疲弊しているんで、デジタルを活用することでどのように効率化できるか、ですよ。それこそ、行政もデジタルを入れることで効率化されると言われていると思いますが、データを活用して、どのように効率化して、教師の方々の負担感を下げつつ、こどもたちが学べるのかということ念頭に入れられると良いのかなと思います。

それと、デジタルを活用して学べる従来の国語算数も大事ですが、最近、起業家に多いですが、デジタルの仕組みが分かっていないから、ビジネスが変わっていきなったりするんですね。仕組みがわかるとビジネスの仕方も変わってきますので、新しい発想が生まれるということが今、足りないのかなと思っています。だから、AI、ChatGPTなんですけれど、自分で作れなくても良いですけれども、どういう仕組みで動いているのかというのは、理解できているのとできていないのでは、ここからどう発展させるかも全然変わってくると思っています。そこも含めて、自分で作れるとい

うことも一番理想ですけれども、せめて、仕組みはわかるころまでは、正しくできて、子どもたちに分かってもらえると、10年後って面白くなるのではないかなと思っています。

## ●大石知事

こどもにしっかり当事者になっていただくことが重要なんだろうと思ひまして、聞いていて、反省しました。確かに、「まちづくりは大人がやることだ」とどうしても頭でっかちなことばかり考えていたなと思ひて、こどもも県民の一員ですので、未来を作っていく当事者なんだということを、しっかり我々として表明すべきだと思ひました。そこに求めすぎはいけませんし、圧迫しちやいけない部分ももちろんあるんですけども、長崎県で生まれ育っている一人として、こういったビジョンを持って長崎で生活していつて欲しいかということは表現できるように考えたいなと思ひました。教育もそれは、重要だと思ひます。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

よろしいでしょうか。次に5ページ、「交流」の分野に移りたいと思ひます。こちらでご意見ある方がいらっしやいましたら、よろしくお願ひします。

## ○安部委員

ありたい姿の実現に向けた施策の方向性の下から4つ目に「世界中のノマドワーカーが安心して訪れ楽しめる環境整備の推進」とありますが、ノマドワーカーに関する県の見解をお聞かせいただきたい。ノマドワーカーというのは、ある意味、住所を持たずに季節ごとに、例えば、アメリカではAmazonの大きな倉庫に期間労働者として行って、地域を変えて仕事がある所に移っていくということで、一方で、イレギュラーな人達っていうものも一部あると思うんですけど。

## ●大石知事

今、表現していただいた一部の方々に特化して書いているわけではございませんので、多様な人種の方々が働けるような受入環境として、今後は、充実させていくというところを表現した形です。

ワーケーションは、自分の所属する会社があつて一時的に来てくれるわけですけども、そういった方々だけではなくて、その地域、長崎県に興味を持って来ていただき、お仕事をしながら長崎を見ていただくとか。その先に定住に繋がることもあると思ひますし、もちろん別の似たようなところに行って比較をされたりとか、ストーリーを持って広めてくださいとか、いろんなことに繋がっていくと思ひます。色々な背景があつて、確かに、中には経済的に苦しいという方もいらっしやるかもしれませんが、ここに来たら安心して働き生活できると、また、地域の方々とも交流があつて好きになってもらえるような、そんな環境ができていくところを表現したいと思ひています。

## ○矢内委員

ありたい姿の内容も、交流というよりは、来てもらうという矢印が、一方向の矢印の内容でしかないように見えます。矢印が双方向に行くような、例えば、長崎に住んでいる人たちと海外から来てくれる人たちがどのように出会つて、一緒に何を生み出していきたいのかとか、そういうのがあつると良いなと思ひました。

それから、ありたい姿の「国際都市として認知され」の後、何で欧米豪に地域が限定されて、アジアや世界中が含まれていないのか、。人が限定されているような感じがして、何でかなというふ

うに思いました。以上です。

## ●大石知事

前者については、来ていただくということをもまずベースに考えていて、来ていただいて、どうい  
う交流をするかについて表現をしています。精査をしていきたいと思ひます。

ありたい姿の一つ目に欧米豪と書いてるのは、必ずしもアジアを否定しているわけでは全くな  
くて、むしろ、現状アジアからの観光客が多いので、別のところも入れていこうと。実際に今、県  
内の外国人の方々を見ると、非常に欧米が少ないというところがござひます。どこをマーケットに  
するかというのは、戦略的に重要な考え方で、もちろんアジアも非常に重要で、これまで力を入れ  
てきたというところはあります。だから、そういったところで欧米豪のみを書き出すと確かに目立  
つのかもしれませんが、決して、そこだけを見ているわけでは全くないということで、ちょっと止  
めておこうかなと思ひます。これはアカデミアや観光もそうですけれども、欧米豪の方々にもぜひ  
来ていただきたいなと思ひています。ありがとうございます。

## ○大川委員

県外向けの発信という意味で書いているとは思ひますが、冒頭で、県民が誇りに思ひ長崎県とい  
うところがあったと思ひます。やはり、県内での交流というものがもっと盛んにできるとすごく良  
いなと思ひています。近所の中学生の女の子が、島の未来応援事業みたいな、壱岐から島原に2泊  
くらい研修に行き、他の長崎県のこどもたちと会って島原のことを知ったり、ディスカッションを  
したりというのがすごく楽しかったと、言っているのが印象的で、離島が多いというのもあると思  
ひますが、長崎県内での交流が少ないなというところで、壱岐も福岡への交通が便利で、県民の意  
識というよりも、その場所にある壱岐の島という感じの思ひが強いのは県内の交流が全くできて  
ないからだと思ひます。

交流してみたらすごく身近に感じますし、あそこの町はこうだったと、他の人にも紹介すること  
ができるので、県内の交流も一つあるといいなと思ひます。

例えば、移動の補助が出たり、島民割引というものを作っただいて、長崎市に出てくるのは、  
飛行機も半額ぐらいになりますし、そこからさらに、五島に行くときにも移動の補助みたいなもの  
があるといいなと。

県内での交流をもっと盛んにして、長崎県はこんなにいいところだよ、ということをもっと言ひ  
たいなと思ひますので、ぜひ、県内の交流も入れていただきたいなと思ひました。

## ○中島委員

県外もしくは海外から来ていただくという話書かれていますと思ひますが、たくさんの人たち  
に1回来てもらうのか、少ない人に10回来てもらうのかは決めても良いと思ひました。

マニアが集う素材を選定するとか、コンテンツを作るとか。例えば、先ほどのこどもとの交流み  
たいなものもそうですし、様々な場所や景色があるので、そういうコンテンツをしっかりとつければ  
何回も来なくなる場所がつかれるかもしれないし、交流のテーマの中に、どっちに重きを置くのか  
入れた方がいいと思ひます。

私たちの会社がある鎌倉は今、オーバーツーリズムがまた再燃してしまひて、すごく沢山の方に  
来ていただひているけれど、もっとステークホルダー的に、もしかしたら交流人口や関係人口に、  
場合によっては移住する方もいらっしやるかもしれないけど、本当にこのまちのことが好きとか、

このまちで何かやりたいっていうところに繋がっていくことがあってもよいと思っています。長崎県の場合、それが、例えば、最初の「こども」の軸に繋がっていく。こんなに私たちのまちって面白くて、変えてくれる人が外から来るんだっていうふうにするには、「交流」と「こども」を、それぞれ縦割りではなくもっと上手くつなげていけば良いのではないかと思います。

#### ●事務局（内田 政策企画課長）

佐藤先生、お願いします。

#### ○佐藤委員

「交流」を考えると、外からの繋がりだけではなくて、県内の中でも人がどう動くかということが、活気を生むことにもなるので、すごく大事なことだと思います。特に。新型コロナウイルスで、観光業がインバウンドを含めてできず、県内の方に頼った現実があった。そういう意味では、もっと県内の社会教育とかいろんな場面の中でそれを使ってできるんです。

あと、やっぱり、リピーターを大事にした方が良い。要するに、顧客を新規開拓するというのは大変な労力がかかる。けれど、リピーターが生まれると、そこから口コミや波及効果もある。しかもそのリピーターが通えば通うほど、いつのまにか同化して行って、サポーターができて、気がつけば、定住化という部分に繋がっていく。そんなことを考えると、リピーターを考えることはすごく意味があると思います。

#### ●事務局（内田 政策企画課長）

その他、いかがですか。

#### ○菊森委員

「交流」は長崎県にとって、最大に重要なテーマであり、ずっと掲げてきたわけですので、コロナの後、交流の形がすごく変わってきていると思うのは、メタバースとかに現れています。

私は、過去4年間メタバースの研究をずっとやってきたんですけど、電子会議などの活用によって、世界中から情報、アイデア、活動家が長崎県に集まるっていう仕組みがすでにかなりできてきているということですね。世界中どこにいても、長崎県のことを議論したり、企画したりあるいはビジネスを行うということができるよう状況に段々なってきたということは事実です。

端的な例を挙げますと、私は、東京である企業の役員をさせていただいているんですけども、いきなり買収をしたいというような話がポンと来るわけです。それだけ情報の開示も行われていますし、そういったことをネット上で常に探してる連中もいっぱいいるわけです。ですから、その確証を取るために実際にリアルで会うというようなことも行われるようになってきていて、そういう意味では、リアルでの交流も、ものすごく大事なんですけど、それと合わせて、ネット上の交流というのは、チャンスを増やすという意味で非常に重要だだと思います。この両方が、これからも同時並行で増えてくるんじゃないかなと思いますので、長崎県がその対象にのるように常に仕向けていかないと、観光でも、産業や企業誘致でも取り残されてしまいそうな気がして、それほど、今のコロナ後の時代の変化ってあまりにも大きいと感じるんですね。そういうことを政策の中にも今後盛り込んでいただきたいなと思いました。

#### ●事務局（内田 政策企画課長）

ありがとうございます。

## ●大石知事

ありがとうございます。県内の交流が足りていないということは、しっかり書きたいと思います。最初にあった欧米豪は、ありたい姿のところの書き込みは、もしかしたら落とした方がいいのかもしれないですね。具体的などころにはあってもいいかもしれないですけども。議論してみます。

最後にあったバーチャルのお話は、マネタイズのとこまでいってるかという、観光産業としてバーチャルの世界をマネタイズしていくにはもう一歩な気がしています。今の段階でそこを推し進めていくんだっていうのはなかなか書きづらいところがあるなと思っていますが、そこは意識しながらしっかり取り組まなければならないと思いますし、実際に、海外の人たちが、飛行機を乗り継いで長崎まで実際に来て、見るということは非常に重要なことです。また、海外の自分の場所に住んでいて、ちょっと覗いてやっぱり行きたい、という意欲を刺激されると、やはり全然違うと思いますから、PRの一環になっちゃうかもしれませんが、何ができるかについては、検討していきたいなと思います。

たくさんの人に一度来てもらうかリピーターか、やっぱりリピーターには来て欲しいです。マニアが集う場所って、長崎県には各分野でいろいろあるなと思っていて、自衛隊が多いですし、歴史もありますし、島もあります。島だと釣りとかですね。いろんなものがありますし、色々な体験を深掘りできるだけのコンテンツがあるのではないかなと思っていて、それをどうソフトを活用していくか、つなげていくかというところで、例えば、佐世保には艦コレがありますが、毎年来ていただいて非常に賑わうような、すでにマニアが集う場所になっていると認識しています。だから、そういった顧客固定のリピーターがつきそうなものをしっかりと県として認識をして、地元自治体とか関係団体と連携しながら、リピーターをそれぞれの分野で獲得していく、そして、そのリピーターを更に増やしていくとことができれば良いのではないかなというイメージでおりました。

もちろん、一見さんも来ていただけるようにしたいですが、リピーターをしっかり増やすことも意識しながら取り組みたいと思います。本当に意見ありがとうございます。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

それでは、次に進ませていただきたいと思います。6ページ、「イノベーション」、未来を創る新たな産業が育つという分野で、ご意見を賜りたいと思います。

## ○大川委員

イノベーションのありたい姿の二つ目の、「最先端のデジタル技術で地域課題を克服し、県民が豊かで快適な生活を送っています」のところは、「交流」とか「こども」とかすべてに繋がっているところだなと思いました。

現状、観光客に離島に来てもらうと、路線バスが船の着いた時間来ないとか、観光地まで行かないということがあります。お盆が繁忙期なんですが、路線バスに1人とか、全然乗っていないのに、お客さんたちはレンタカーがないから、移動手段をどうしようか、自転車にしようと言っている。でも、炎天下だったりとか、都心から来る方や海外の方は運転ができない方も多い。ぜひ、これを何とかデジタルの力をお借りして解決したい。今は、オンデマンドバスというのがありました。いろいろ課題はあると思うんですけど、路線バスに観光の繁忙期に1人も乗っていない状態で、だけど、お客さんは移動手段がなくて非常に困っているということが、すごく不思議だなと



思っています。

あと、こども時間プラスにも関わってくると思いますが、小学校の高学年になってくると部活が忙しくなってきたり、親御さんは送り迎えが大変そうだったり、仕事にも影響してたりします。こどものために、一緒に乗り合わせて行ったりとかして、皆さん頑張っておられるんですけど、これも何かデジタルの解決策がないかなと。移動手段に関しては、ぜひ力を入れていただけたらいいなと思いました。

市内の方とかは、こどもたちが自分でバスに乗って移動して、図書館に行ったりすると思いますが、離島だと、他町の大きい図書館に行くための路線バスがちょうど良い時間帯に来ないとか、帰ってくるのも夕方の便になるとか、乗り継ぎが必要だとかで1日かかりです。病院に行くのも、年配の方もお見舞いに行くのにも1日かかりというところがすごく課題だと思っていて、こどもが行きたい町にちゃんと行けるように、通学バスもあるけれど、歩きだったり、自転車もまた再開させてもいいなと思うんですね。ぜひ、移動のところで、ぜひイノベーションが起こるといいなと思っています。

## ●大石知事

ありがとうございます。モビリティって本当に大切で、今やっぱりデジタルって、実施する主体があって、持続可能な形にするときにどう課題を乗り越えていくかというところをデジタルでクリアできたりすると思うので、そこは民間のモビリティを提供する社とか、基礎自治体の方々とか関係者を含めてしっかり議論していきたいというふうに思います。

とても大事なことだと認識をしておりますので、引き続き県としても、役割分担をしっかりと認識しながらやっていきたいと。

## ○村上委員

今おっしゃられたことはすごく大事で、技術的にはできたりするんですけども、やっぱり規制とか法律が結構厳しくてなかなかできないというところが、実証実験だったりとか、そういったことをやっていくことで繋がっていくのかなと思います。

あと、実証実験となると、地元の人たちの理解や協力が必要になってきますので、そこら辺をどう進めていけるのかだと思っています。これは、長崎に限らずなんですけど、私も五島とか行かせてもらったときに、船が朝の便しなくて、朝着くんですけども、どこもお店が開いてなくてどこにも行けないとか、すごくもったいないなと思っています。

私は、福岡市でも10年か15年関わらせてもらっていて、最近思ったのは、産業が育つということもすごく大事なんですけども、その産業に関わる人たちも育つということがすごく大事なかなと思っています。それこそ、人手不足のところもあるんですけども、地元の人たちがこの産業に関わるという流れができることもすごく大事で、それこそシビックプライドにかかってくるのかなと思うんです。

起業家ばかりが目立っちゃって、でも、実は会社って起業家だけじゃなくて、エンジニアもデザイナーもマーケターもいろんなスペシャリストがそろってチームとなって成長できるっていうところが、置き去りっていう言い過ぎなんですけども、ここに着目してどれだけ取り組んでいけるかが、今後、大きなポイントになってくるんじゃないかなと個人的には思っていますので、その部分もここに入ってくると良いのかなと思っています。

## ●大石知事

今、村上さんの話を聞いて思ったんですが、ぜひ、新しいテクノロジーが社会実装される場所に長崎はなって欲しいと思っていて、さっき言ったように規制があって難しいところもあります。けれど、地域にすでに導入して欲しいニーズはあると思っていて、長崎には、もうすでに大川さんが描写してくださったように、実際に成り立ってないところもあるというふうに認識していますから、そういったところに、まだ認められてないけれども導入すると、もしかしたらソリューションになるかもしれないというところを、社会実装する部分で長崎をぜひ使っていただきたいと。

今後、人材も少なくなってきましたし、少子高齢化でなかなか社会的な機能を維持していくのが難しくなることがこれから日本中にできてきますから、そこを島という海に隔絶された社会の中でどう維持していくかというのは、我々が示せるかもしれない、次の世代の日本に対して示せるかもしれないソリューションですね、そういうチャンスに溢れたまちになっていくかもしれませんので、そういった意味では、新しいことは長崎県で何か起こってるんだと。それは誇りに繋がると思いますから、難しい課題はあるけれども、新しいことで解決するところにしていきたいなと思っていますので、ぜひ、そういった壁を突破していくようなことも国にしっかり訴えていきながら県としてもやっていきたいです。

## ○中島委員

産業を、特にイノベティブなものを作っていくことは、ある意味、成功することが確証されていないものを作ることになりますので、企業としてはかなり投資をしなければいけない。儲かるまでに時間がかかるというのが付き物だと思います。「イノベーション」という領域では、長崎で起業したらお金が集めやすいと言えれば、みんなここで起業すると思います。

例えば、その方法としてクラウドファンディングもそうだし、ふるさと納税でいくつか領域を決めて、県なり市町村を集めて、それを企業に入れていただいてもいいかもしれないし、今、お金の集め方ってNFTとか、色々と選択できるようになってきていて、手段は色々あると思いますが、投資されるために、県がどう応援するのかということを入れてあげられると、ビジョンとしてもすごく輪郭がはっきりすると思います。お金が集まれば人も集まるし、良い研究もできますし、そこに県の方々とか若い人たちが関われば、年代的な給与の水準が上がってくるかもしれないし。なので、投資されるように応援することは、ひいては県が投資されるようになるっていうことで、それは何かぜひ入れていただけるといいなと思いました。以上です。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

貴重な意見ありがとうございました。どうぞ。

## ○菊森委員

私は、長崎県って次世代モビリティとかドローンについては、まさに社会実装をもっと進めていいのかなと思っています。長崎市が今まであんまりこの分野で動いてこなかったんですけど、ぜひ、この分野で、長崎市はもちろんのこと長崎県全体、特に大村湾の活用と外の海の活用によって、できるだけ規制を緩和しながら、海上のルートを使って効率的な物資の搬送と人の搬送ができるようなことを早く取り組んだ方がいいのではないかと考えています。

今、新しいプロジェクトを立ち上げようとしています。ですから、海が存在って極めて大きくて非

常に使える存在だなと日頃思っておりますので、私としてはこれを進めていきたいなと思っております。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

ありがとうございます。では、次の分野に進みたいと思います。7ページ、「食」です。ご意見ある方はよろしくお願ひしたいと思います。いかがでしょうか。

## ○下川委員

食については、長崎の食は魅力があるということは皆さんおわかりだと思いますけれど、そういう意味では、シビックプライドをすごく醸成しやすいのかなと思っています。

青森県ですと、小学生の下敷きの裏にリンゴがたくさん載っていて、それでリンゴの種類を覚えているので、リンゴを見たら、これは王林、これは何々、みたいに言えるらしく。長崎の場合は、それが魚だとして、魚の下敷きで、これサバ、これは何々、鮫のネタとか刺身とかの魚の種類を長崎の人は普通に言える。それで、東京とか他のところに行ったときに、俺、長崎出身やけん。みたいな。それで長崎ってすごいな、ということ勝手にそれぞれがPRして。魚だけじゃなくて、いろんところで醸成しやすい文化があるのかなと思いますので、そこはすごく期待します。

もう一つは、この「食」の部分だけではなく、すべてに当てはまるとは思いますが、情報発信の部分、もちろん対内的にも大事だとは思いますが、やっぱり、県外の人にどんどん情報発信したいなというところで、「施策を貫く3つの視点」の2番目の全体的なところに関わってくるのかなと思います。情報発信というと、一番簡単に思いつくのは、マスメディアに告知をすとかインフルエンサーや芸能人を利用すとか、そういうふうにお金をかけて情報発信していくというのは、すごく重要だと思いますが、今後は、自社で、いわゆる自分でアカウントを持つということです。

SNSに特化してのお話になっちゃうかもしれませんが、SNSのアカウントを自社で持つ成功事例とか例えば、ふなっしーとかくまモンとか、そういうゆるキャラとかできたら、より情報発信しやすいのかもしれませんが、何らかの形で、自社のコンテンツを持って自分で発信する。自社でコンテンツを作るところの視点がすごく重要なのかなと思いました。もし、それができれば、今までお話されていた部分、結構、色々なところが解決するのかなと思っています。

ただし、これは、多分半年とか1年とかじゃなくて多分2年、3年とか長期スパンで関わってくるとは思いますが、例えば、先ほど佐藤先生がおっしゃいました、認知度じゃなくて人気度。多分、広告でやってるだけだと、認知度だけ、一瞬で終わっちゃうんですけども、自社アカウントで長崎の和牛はすごいとか繰り返し言うことで、認知度だけじゃなくて、少しずつ魅力を皆が理解していて、人気度につながっていくというところがあると思います。

あとは、もう自分事にするみたいなこともあったと思うんですけども、SNSの特徴は、自分が発信するっていう旧来型のメディアじゃなくて、ユーザーをどんどん巻き込んでいくということがあると思うんです。実際にやっているのは、例えば、フォトコンテストがすごくわかりやすい。長崎でいうと、いさはやグラム、4千アカウント位のフォロワーがいます。諫早の好きな景色をアップして、毎月、何回もコンテンツとして、フォトコンテストがやりやすい。

それ以外にも、私が把握してるのは、例えば、川柳や文章、作文を募集したり、そういうのはいろいろ作りやすいと思う。あとは、大喜利とか面白い。長崎でなんとかとか、ちょっとボケてみてとか、そういうことをすごくやりやすいと思う。そこに1位には景品で長崎和牛とかにすることで、

また盛り上がる。自社アカウントがあればそういうこともしやすくなるかなと思います。他社にお願いするのか、それとも自社で発信するのか。そういうコーディネートはすごい重要なところ。そういうところを考えていただければと思います。そのうえで大変なのは、炎上リスクとかだと思うんですけど、その辺りも、いろいろノウハウがあると思いますので、対策しながらしていただければと思います。

## ○楠本委員

「食」に関してのありがたい姿、長崎の食材が世界中にあふれ、その美味しさは子どもたちを笑顔にしていますとか、長崎でないと出会えない味、味わえない体験があるとか、想いをつなぎ大切にしていますとかっていう、ありがたい姿のキーワードに対して、施策がちょっとずれてるっていうわけではないんですけど、ちょっとわかりにくいかなっていう感じを私は受けました。

普通に大人が読むとわかりますが、子どもたちを笑顔にするために魅力を伝える手段とか、わりと世界向けの話になっていて、県内で魅力を伝える施策がもう少しあっても良いと思いました。

それこそ下敷きの話ではないですが、長崎県ってこんな食材の魅力があるんだよと、子どもが話せるぐらいにしていけないと、世界に向けてという遠いかなと思いますので、もう少し県内のものを県内で食するとか、離島のものがもっと長崎市内に入ってきやすいとか。

私が農業と繋がりがあるので、どこで繋がるかっていうとバリューチェーンとかありますけど、長崎は流通がすごくネックになってくるんですね。なので、その生産者と消費者までの間、流通の過程が子どもたちにまでわかると良いのかなという気がします。そうするともっと、魅力が他の県にも伝わるのではないかなと思いますので、輸出の前にまず県内の人、長崎ってこうなんだよって話せるレベルで、何かわかるものがあるといいなと思います。

## ●大石知事

ありがたい姿の1個目の「子どもたちを」って落としても良いのかなと思ひまして、世界中の子どもたちだけに絞る必要はないのかなと。そのうえで、下川さんや楠本さんが仰ってくださったように、子どもたちが県内の食材について誇りを持つことは重要だと思います。

下敷きのお話だと、魚だけではなく裏を見ると野菜が載っていたりとか。県外の要人の方々と話す機会があるときには、長崎の隠れ一位を紹介するんですよ。実をいうとトラフグとかクロマグロが、という話をすると驚かれることも結構あって、やっぱり知られていないんだと思うんです。そういったことも、もしかすると、いろんなもの的一位なものがあるんだよとか、例えば、それが食材だけじゃなく生産者の方々、海女の方々、農業でも漁業でもいろんな方々がいらっしゃいますので、そういったところを数値で示すとか、何年度版みたいな下敷きを毎年作ってもいいかもしれないですけど、何かそういった県民の子どもたちが自分の県内の食材に誇りを持つということ。

あと、海外に対しては、大人としては旅先で、これ長崎県産だよ、と言われたら嬉しく思うところもありますから。東京に行って、そのおいしいものを食べようかなと思ったら、長崎県産だったみたい。そんなことも嬉しい限りでございます。だから、そういった年代を少し意識しながら、もう一度見てみる必要があるのかなと聞いてて思いました。

## ○佐々木委員

食材のストーリーとかヒストリー。それぞれの食材に対していろんな物語とか歴史とかがあるので、その辺りをもっと子どもたちや県民の皆さんにわかっていただくような取り組み、例えば、

対馬でいうと、アナゴが世界、日本でかなり有名になりましたが、それは流通に携わっている、島居さんという方が、流通や加工を通じて、対馬のアナゴを世に送り出す取り組みをされたという物語がありますし、私の故郷西海市だと、原口みかんは、なぜ原口っていうかという、原口さんが発見して育てたなど、色々な食材にそれぞれの物語や歴史があるところを、県民の皆さんに知ってもらい、そのエピソードを県外の人達に伝える事ができる、県民一人一人がセールスマンになるという流れができるのではないかと思います。以上です。

## ●事務局（内田 政策企画課長）

ありがとうございます。8ページ。最後、「健康」の分野になります。こちらについて、ご意見賜れればと思いますけども。いかがでしょうか。山本委員、お願いします。

## ○山本委員

オンライン診療の普及は必要だと思っていて、やはり島が多いので、具合が悪いのに船に乗って、大きな病院まで行くというのも大変だと思うのです。ただ、オンライン診療だけではなく、長崎県が進めているあじさいネットっていう診療情報、カルテの情報を他所の病院でも閲覧できるシステムを普及しようとしているのですが、なかなか進んでないみたいで。それをやらしてもらわないと、具合が悪い中で紹介状を持って、初めて行く病院で、アレルギーありますかとか、また1からの説明となると大変ですので、基本情報だけでも、どこの病院でもこの人はアレルギー持っているとかいうのが聞かなくても、大体わかるっていうように整えてもらいたいというのがあります。

病院の先生方に何でしていないのですかと聞くと、あじさいネットはお金がかかるというのが一番ネックになっていようと、今、インターネットに繋いでおけば、無料で何でもできるのが私的には普通なのですけれど、あじさいネットはお金がかかっているところがあるところがあります。患者さんの負担を少なくするようなシステムは、きちんと普及してもらいたいというところがあります。ですので、オンライン診療とあじさいネットは、両方一緒に普及を進めて欲しいなと思っています。

## ●大石知事

ありがとうございます。非常に重要な点だと思います。あじさいネットは何でお金がかかるのかっていうのは非常にいろいろかかりますので、それはそうです。

あとは診療の機会はデジタルだけでは無理があって、どうしても対面にならなくちゃいけないものなので、定期受診でお薬をもらうとか、そこに海があって、なかなか行き来ができないとか、そういったところをやれるようなテクノロジーが必要になってくると思います。ここでありがたい姿の一つ目を読んでいって、私もちょっと表現を完全にできてなかったなと思って反省したのは、「次世代医療先進県として、デジタル化の促進などにより」って書いていますが、これが先進医療的なイメージで捉えられる気がしますが、今の話を踏まえて言うと、これは受診機会の確保なんです。島を出て受診しに行かなくちゃいけなかったところをしっかりと遠隔でもできてると。そして、そこにはお薬を薬局までもらいに行かなくても、島を出てお薬を買いに行かなくてもドローンで運ばれてポンと落ちてくると。そして、お薬の飲み方がわからなければ、薬剤師の方々にちゃんと相談ができて指導を受けられると。こういう一連の行為がちゃんとできるんだというところまでやって初めてかなというふうに思っています。

もう一つは、あじさいネットの話もありましたけれども、今後、情報のあり方っていうのは、長

崎県だけではなくて、どうやっていくかっていうのを議論されていくと思いますけども、これは医療だけではなくて介護も含めて、しっかりと情報共有をしていけるような、そういった社会になっていくんだろうというふうに思ってます。ただ、それを書き表すのは関係者もある中で非常に難しいなと思いますので、それは頭の中に入れつつ検討したいと思います。書き込めるかも含めてですね。

### ●事務局（内田 政策企画課長）

その他、いかがでしょうか。

### ●大石知事

二つ目の、シニア世代の方々が生きがいを持って活躍しているものがあるんですけども、私はこれ非常に重要だと思っていて。全世代の方々が社会に参加して、社会の中で共助、互助の中で元気を維持すると、そこは行政的にいうと、医療費が下がっていくということに繋がっていくかもしれませんが、生きがいを持って楽しむという姿を、県としては描きたいんです。

こどもという分野は作っていますけれども、こどもだけではなくて全世代の方々が輝いて楽しんで暮らしている社会というのを描きたいので、ここを私としては思いを持って表現したいなと思っています。

「健康」分野は、他のところと比べると、実を言うとありがたい姿が1個少ないので、皆さんからアイデアがあればと思っていますが、いかがでしょうか。

### ○入江委員

県民向けではないんですけども、最近、医療ツーリズムが出てきていますので、そういった視点も入ると、「交流」や「食」も絡むでしょうし、そこに何かしらの「イノベーション」が生まれてくるんだろうなと思いますので、医療ツーリズムの観点も入れていただけると良いのではないかなと思っています。

### ○中島委員

この課題を解決するために、デジタルとか先ほどの「イノベーション」の領域にも関連する取組みがあると思いますが、その時に現行の領域ってどうしても何か規制を受けそうだなと思いますので、予算措置だけでなく、規制を緩和する特区を作るとか、何かそういう形で、ある意味その医療の業界の技術が長崎県でもっと活発につくられていくような場がありたい姿としてあっていいのかなと思いました。

### ●大石知事

目指す姿としてはそうなるべきだと思っていて、先ほどお話をした医療行為を一連の行為としてちゃんとここでできるように、完結できるようにしていくんだってなったときは規制緩和もあると思います。

ビジネス上で申し上げると、診療報酬って全国一律で決まっていますけれども。陸路で繋がってる部分と島の部分で採算性が全然違いますから、そういったところもしっかり変えていかなきゃいけないんだと思っています。けれども、ここに特区とか書いちゃうと、百ゼロの世界で見えちゃうので、なかなか書きづらいなっていうところがあって、そこは意識しながらしっかりやっていき

たいと思います。

## ○矢内委員

さっき知事が、こどもやシニアだけじゃなくて全世代が生きがいを持ってっておっしゃったのはすごく大事だなと思ったので、もっとそのことが伝わるといいなと思いました。今の全体と、ここだけの書きぶりだと、こどもとシニアに目を引く状態になっていますが、健康を考えると、どの世代の人たちも、生きがいを持ってとか、例えば、現役世代だったら仕事だけではなく、地域の中での活動とかが、豊かにできるということが、こどもの育ちもきっと支えていくと思います。新しく大きなイノベーションではないですが、何か知恵を生み出すようなきっかけになっていくと思いますし、働き方改革ということを考えてときに、仕事だけではなくてプライベートも、それから地域での生活を豊かにできるというのは、大事なことになってくるのかなと思います。

なので、そのような色々な世代にわたっての生活全体を、単に病気になった時だけじゃない、健康というか、文化的な暮らしというがもっと、知事がおっしゃったことが伝わるといいなと思いました。

## ●大石知事

ぜひ、今のところ私も何か表現できたらなと思うんですけど、今1個目が、受診機会の確保になってるので、例えば、救急医療、先日も長崎医療圏が話題になりましたけれど、そういったところも含めて、しっかりと受診したい方が、離島も含めて必要な時に受診できるといったところを書いています。下は、先ほど申し上げたとおり、シニアの方々の生きがいを持って生活できるように。

それと、もしかすると、全県民の方々がシニア以外の人も含めて、健康リテラシーをしっかりと持った上で、意識を持って参加してるんだということを表現したほうが良いのと思っていたんですけど、皆さんから何かアイデアがあれば。

## ○安部委員

全世代型の健康づくり、生涯スポーツとか。医療がずっと書いてありますよね、医療と高齢者福祉ってということなんですけども。ひょっとしたら、生涯スポーツとかそういう意味での健康づくりというのが、「健康」の一つの分野に入るのではないかなと思いました。

## ○山本委員

私もスポーツを考えていて、例えば、弓道とかは、中学生から上は上限なくできるスポーツです。

最近、体をつくるジムのものが流行ってきて、少し体力つけたいと思って、ジムをいろいろ調べていたのですが、年会費と使用料を考えると金額が高いのです。入ったからといって続くのかなという不安があって、二の足を踏んだのですが、やはり女性向けのそういうジムとかもあって、入られている方もいらっしゃるのですが、金額が高額なので、通えるかという、経済格差により通えない人もいます。他所の県では、そういうところへの補助があるのですが、長崎県は健康づくりのための補助は見当たらないので、そういうところも作った方がいいのかなと思ったところです。

## ○村上委員

デザインの話になると思うんですけど、最近知り合いと話していた時に、シニア、高齢者、ご老人というのが、私たちはもう老人なのか、という話を話していて、ちょっと調べたら、30年前の新

間記事では、50代はもう老人だったと言うんです。でも、今50代の方は、老人と思っていないのではないかと思って、そこら辺の言葉も結構難しいと思いました。

最近、社会貢献活動、ディ・セントラル、中央政権じゃない。みんなが平等で分散したというところでも話が出たのは、社会貢献に対しての評価を入れることということで、モチベーションを上げていくとか、それが今でいうデジタルの分野でいくと、ウェブ3.0だったりするのですが、別にそのウェブ3.0でなくても、何か今でもされていると思うんですが、貢献された方に対しての評価、表彰なんか。アナログでもできて、それを充実させるということで、生き生きとしたボランティア活動、要は、モチベーション的なところをどうしていくかが、ポイントになるのかなと思いました。具体的な話で申し訳ないんですけども、こういったところも盛り込めると考えます。

#### ●事務局（内田 政策企画課長）

ありがとうございます。皆さん方のご協力に感謝いたします。それでは、本日の意見交換は、これもちまして終了させていただきたいと思っております。本当に熱心な議論、それからご意見、本当にありがとうございました。

本日いただきましたご意見等を踏まえて、修正すべきところは修正して、ビジョンを作成していきたいと考えております。皆様方のご協力に感謝をいたしまして、マイクを事務局にお返しをしたいと思います。

#### ●事務局（小柳 政策企画課企画監）

ありがとうございました。それでは閉会に当たりまして、大石知事からご挨拶を申し上げます。お願いいたします。

#### ●大石知事

本当にありがとうございました。皆様に参加していただいて、ご発言いただいて、有意義な意見もたくさんいただきましたので、ぜひ、良い形でまとめ上げて、県民の皆様にお示しできるようにしたいと思います。

今後は県議会議員の方々も含めてですね、様々な方々にご意見伺いながら成案をまず年内に作り、公表については年度内にできるようなタイムスケジュールで進めていければと考えています。

作って終わり、公表して終わりではなくて、県民の皆様方に自分事として捉えていただけるようにちゃんとデリバリーとか、どう進めていくべきか、広報も含めてしっかりと検討していきたいと思っております。

今回、3回目の懇話会ということで1回目、2回目ご意見いただいた方々も、ご参加いただいた方々も多くいらっしゃいますけれども、改めて感謝を申し上げたいと思っております。皆様方のご尽力を、しっかりと県の発展につなげられるように、我々も頑張っていきます。

改めて、色々ご相談させていただくこともあろうかと思っておりますけれども、類まれなる高い知見をお持ちの方ばかりですので、ぜひ、今後も長崎県の発展のためにお力添えをいただければと思います。ありがとうございました。

#### ●事務局（小柳 政策企画課企画監）

それでは、これもちまして、新しい長崎懇話会を終了いたします。ありがとうございました。



以上